

内なる自由を問う、作家とことば



2016年9月8日～10月4日の約1か月に渡り、「la galerie（大阪府茨木市）」にて開催された城下浩伺展。la galerieの13周年記念とも重なった本展では、これまで「自分の作品を言語化するのを避けてきた」という作家・城下浩伺が、あえて殻を破るように、国立国際美術館の学芸員である福元崇志氏を招き、オーナー河上友信氏らとアーティストトークを展開。初めて作品を公に発表して以来、その内面で変わること、変わらないこととは。言葉にすることで失われてしまう何かをおそれつつも、細い綱の上を渡るように言葉を探し始めた城下浩伺。その迷いや矛盾も含んだありのままを、感じてください。

編集：クイール 松本幸 デザイン：みふくデザイン

パネリスト



城下浩伺
1974年、京都生まれ。京都造形芸術大学卒業。
約10年間未発表のまま絵をかきためた後、
2013年4月大阪中崎町のギャラリー「iTohen」
での初個展をきっかけに発表を始める。



福元崇志
1982年生まれ。2015年より国立国際美術館
研究員。
「エック・ホモ 現代の人間像を見よ」(2016)
「クラーナハ展—500年後の誘惑」(2016)な
どの展覧会にかかわる。



河上友信
空間デザイナー。築100年超の木造邸宅をリノ
ベーションしたオルタナティブスペース「GLAN
FABRIQUE」を主宰。ギャラリー la galerie ディ
レクターとしてアーティストのブッキングや展
示構成を行う。



林 智樹
1980年生まれ。芸術大学・美術学科卒業。福
祉施設に勤務。仕事の傍ら、作家・城下浩伺と
TACOを中心に活動する「act」のまとめ役を
担うなど、公私で美術家をサポート。社会福
祉士・学芸員資格を有する。

作家・ギャラリーともに節目となる展示をめぐって

河上 みなさんお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。当ギャラリー la galerie ディレクターの河上です。城下くんの個展はうちでは2013年に続き2回目になります。今日のトークでは城下浩伺が初めて吐露することもあるかもしれませんが（笑）ぜひお楽しみください。

福元 初めまして、福元です。僕はこの展示を通して初めて城下さんの作品を知った「城下ビギナー」ですが、知らないからこそ気づけることもあると思いますので、そういう立場からお話ができればいいなと思います。

林 司会の林と申します。僕はふだん福祉施設で知的障がいのある方々のアーティスト活動をサポートする仕事をしています。城下さんとは4年前に出会って以来の付き合いで、個人的に展覧会の企画運営を手伝わせてもらっています。今日は進行役を務めさせていただきます。

城下 作家の城下です。今回の展示のお話を河上さんからいただいたのはもう1年以上も前だったんですけど、その頃は僕がバタバタしていて時期がなかなか定まらなくて。ようやく9月にやろうってことになって、それがちょうどラグリ13周年記念の時期だったので、せっかくの記念展示なら面白いことしたいなって。たまたま今年の春に東京のメゾンエルメスで見たシャルル・フレジェの展示がすごくよかったんですけど、その展示構成を建築の方がされていたのを思い出して、だったら河上さんも空間デザイナーだし、今回は河上さんも展示づくりにガッツリ関わってほしいと思って、僕と河上さんと林さんとでいろいろ話をしながら作り上げてきました。

河上 僕も城下くんの2度目の個展ってことで、よりスケールアップした内容にしたかったので、ギャラリーだけでなく全館使おうって言ったんです。それでギャラリーでは「対峙し鑑賞するアート」、カフェでは「お茶の時間に寄り添うアート」、奥の部屋では「暮らしに溶け込むアート」という3つのテーマを設定しました。とくに奥の部屋は、ここが住宅として人が住んでいた頃の面影がそのまま残ってる部屋なので、床の間の掛け軸がわりに作品を置いてみたりして、もし誰かが作品を買おうと考えた時に、家に飾るイメージがしやすいようにしました。



ギャラリースペースだけでなく、カフェやふだん非公開となっている奥の小部屋でも作品を展示。期間中のカフェでは、城下浩伺の作品群からインスパイアされたコラボスイーツを、城下が絵付けしたプレートで提供するなどの試みも。

城下 あとは河上さんに「ギャラリートークをやるなら、誰と話したい？」って聞かれて、僕すぐに福元さんのことが頭に浮かんだんです。そもそも福元さんのいる美術業界は、僕にしたら恐れていた世界です。でも以前に福元さんのギャラリートークを聞いたことがあって、その時のお話がすごく面白かったんですよね。作家の思いを掘り下げていく誠意があって親しみやすくて。その時一度名刺交換したきりだったけど、思い切ってダメ元でメールしたら快諾してくださって。

福元 まだ学芸員になって1年そこそこの僕に、そんなふうになんて声をかけていただけるなんて光栄です。

「日本古来の“美の愛で方”にも思いを馳せてみたくて」 —— 河上

林 今日では城下さんの作品を、それぞれ違う立ち位置から語っていただけだと思います。城下さんは作家。河上さんはアーティストを見つけ、デザインや空間設計で作品を活かし、お客さんとの間をつなぐ立場。福元さんは美術作品を研究し、展示をしたり言葉に変えていく立場。僕は公私ともに作家を支援する立場であると同時に、美術作品の購入者の立場でもあります。まずは河上さんの立ち位置からですが、今回城下さんの展示をやりたいと思った理由は…？

河上 今年は城下くんやなって前から思ってたんです。周年展示っていうのは非常に大事な展示で、こういうアーティストをバックアップしてますというギャラリーの意思表示でもあるんです。2013年に城下くんの作品を初めて見た時からやっぱり光ってたけど、そこからうちで個展をしたり、act（※関西を拠点に活動するアーティストを、カメラマンやデザイナー、翻訳者らクリエイターが支援するプラットフォーム。第1弾の展覧会では、城下浩何とTACOの共作シリーズを発表）の活動を展開したりと、これまでもすごいスピードで成長していて。もう関西を飛び出して東京や海外へ向かっていく段階だと思うので、城下くんの関西圏でのギャラリー展示は今回で最後にしても良いのでは？くらいの気持ちで、相当気合いを入れて会場構成しました。うちはホワイトキューブじゃない特殊な空間ですが、そもそも日本古来の美を愛でる形って、お茶席だったり床の間だったり最大にして最高のギャラリーで、自分の一番いいものを飾ってお客さんに見てもらおうという…、美が暮らしと密着している、暮らしのなかに溶け込んだ存在だったはずなんです。日本に西洋美術が入ってきて、アートは美術館やギャラリーで見えるものになってしまっているけど、そもそもの日本の美の愛で方を考えてみたいというのもありました。



城下浩何とTACO。年齢も性別も画風も異なる作家同士が、信頼関係のもと競い合い補い合うように共作をした「act」の展示。(2014年12月la galerieにて)

林 河上さんはかなり初期の頃から城下さんの作家活動や将来の展望を見てくださって、作家に近いギャラリストですよ。一方で福元さんの立場というのは…。

福元：さっき、学芸員や美術界は怖いみたいなお話がありましたが、そんなことはないです。実際のところ学芸員と呼ばれる人と、そういう世界に属していない普通の来場客との間に、質的に違いはないと僕は思っています。あるとすれば量的な違い。見ることを仕事とし、来る日も来る日も美術について考えている、という時間の量の差ぐらいしかないので、あまりプロとアマチュアみたいな違いを線引きして考える必要はないと思っています。

「作家にとって大切なのは、答えよりも“問い”」 —— 福元

林 作家が学芸員を怖いと思うのは、自分がどういう意図で何を作っているのかというのを言語化できないと、福元さんたちと対話できないっていう不安もあるんじゃないかと…。

城下 それはめっちゃありますね。

福元 そんなことはないと思います(笑)。すべての作家が饒舌である必要はありません。ただ僕が作家さんから聞きたいのは、はっきりした答えではなくて作品を作るに至ったモチベーションや起源がなんだったのかということ。何で作りたいのか、なんでこういう形にしようと思ったのか。それはどんなにつたない言葉であっても、言語化できるはずなので。すべてを語る必要はないけど出発点は語ってほしいというのが願いです。

林 「言葉を持ちえないから表現をしている」って作家はけっこういますが、作家側が言葉に恐れを持ちすぎている部分もあるかもしれません。

福元 饒舌である必要はないというのはつまり、「答えを明確に持つて必要はない」ということです。でも問いは明確に持つてほしい。「問いの質」で作品の良しあしは決まると思っています。重要なのは答えじゃなく問いの方で、簡単に答えが出て言葉で語りつくしてしまう作品は面白くないと思います。

「10年間ずっと描いてたけど、誰にも見せてなかったんです」 —— 城下

林 では城下さんがなぜ絵を描き始めたのかという話に入っていきたいんですが、実際に描き始めたのは…?

城下 初個展の10年ぐらい前からです。僕は大学で4年間デザインの勉強をしてたんですけど、向いてないと思って卒業後いったんやめてしまって、そのモヤモヤしてる中でかき始めました。10年間ずっとかいてたけど、誰にも見せてなかったんです。かいてること自体が最大に楽しくて、それ以外のことが必要なかった。人に見せるためじゃなく自分のためにかいてる期間でした。唯一絵を見ていた嫁と友達は、ずっと個展をやれと言ってくれてたんですが、僕は「余計なお世話や! やめてくれ!」みたいな(笑)。

林 でも、2012年に僕が城下さんと出会ってからは、僕も個人的にできることをしようと、作品を展示できるギャラリーを半年ほどかけて一緒に探しました。それがiTohen(※大阪中崎町にあるギャラリー)での初個展につながったんですが、発表に踏み切ってみてどうでしたか?

城下 初個展やってみたら次もやりたいってすぐに思えたんです。当時はまだ作品に値段つけることも理解できなかったんで非売品ばかりでしたが、欲しいって言ってくださった人もいて、こんな作品欲しがってくれる人がいるということが驚きでした。だから2013年から今までの3年でいろんなことが一気に起こってて、自分にとっては激動ですね。

林 2015年の年明けには、東京で開催された「アートオリンピア」という国際コンペに出品しましたよね。審査員は日本の現代美術界で名高い方や、海外の商業ギャラリーのディレクターなど、業界ではとても権威のある方々で、このコンペで城下さんは52か国4800点のうち5位になったんですね。作品に対して初めて美術界からの評価を得たわけで、賞を取った作品は東京の美術館に収蔵されることになりました。そのあと、京都にあるホテルの改装に作品を提供したりというのもありましたね。



アートオリンピア出品作(タイトルなし、ペン、墨/紙、パネル)

「僕にとっての絵は、自由であろうとする意思表示」 —— 城下

林 絵を見てもらう機会や場が増え、少しずつ作品も売れ始めているというのが今なんですが、今日は実際に城下さんが何を思って絵を描き続けて、この先どこに向かうのかを聞いてみたいんです。今まで城下さんは自分の作品についてあまり語ってこなかったですね。

福元 素朴な質問ですが城下さんは何を描かれてるのでしょうか？

城下 これまではずっと自分の作品を言葉にするのを避けてたけど、半年ぐらい前から言葉にしないといけないって思いにかられて、まとめた文章というカステートメントがあるんです。

「訳が分からない事ばかり起きる、不条理で、不自由な社会で僕は、絵の中に自由を追求する。
それは、モチーフからも、タイトルからも、色彩からも、技術からも、記号からも、思い込みからも僕自身の事情や、感情や、想像力からも自由であるという事である。
こういった無数の条件を前提とし、同時にそれに制約されないという矛盾を自然に成立する。
それが僕のかいている絵。」
というものです。

福元 「自由であらねばならない」という制約からも解放されたいと。その自由を体現してる作品ということですね。また鑑賞者もどんなふうに捉えても不正解はない、見る側にもその自由が与えられてるってことですね。

林 絵を見に来たお客さんはどんな感想を口にされますか？

城下 どこからかき始めたんですかとか、これは地図ですかとか、顕微鏡で見た何かみたいとかはよく言われますが、そういうふうにも見えますねと答えて否定はしないです。

福元 自由の探求として描きながらも、なぜこの形で筆をおいて完成とされたのか。そこには何かあるんですか？

城下 かいてる最中は、どんな形になるか自分でもわからないんです。最初に点なり線なりを打つんですけど、そしたらその横にこの点が必要だ、その横にはこの線が必要だ、っていうのが見えてきて、それをずっと追ってなぞっていった感じ。で、これ以上もう僕は線も点も足せない、完璧な形ができたなって気持ちになった時が「完成」の瞬間なんです。



福元：意地悪な見方かもしれないけれど、2つの疑問があって。ひとつは、見る側は好きに見ていいしどんなふう解釈してもいいという点。正解がないというのは美術作品である以上、すべての作品に備わってくる要素であるはずで。どんなにわかりやすい具象画を描いていても100人いたら100通りの解釈の仕方があるのが当然なので、それ自体をコンセプトとして示すことができるのか？と疑問に思います。もうひとつの疑問は、「自由であること」と「無規定であること」は果たして一緒なのか、というものです。僕自身は、自由という言葉はある程度の制約やルールがあってこそというか、自由の反対語「不自由」があってこそ際立ってくる要素なのかなと思っています。だから城下さんがある程度作品の見方の道筋を示したところで、見る人の自由は損なわれないと思うんですけど、どうですか？

城下：でも僕自身が、絵を見る時にタイトルとか上下左右とかが決められて、それに影響されてしまうのに抵抗があって…。だから今も自分の作品にタイトルつけられないし、自分の絵を読み解くヒント、方向づけるものを一切無しにしたいんです。ある意味サービスピ精神ゼロというか、これを見て自由に感じられますか、みたいな問いを見る人に突き付けてる面もあるんです。だから見る人をすごく攻撃してるような気持ちになる時もあるというか…あんまりやさしくないなと思います。

「ますます混沌とする美術界で、“言葉を持っておく”意味」 —— 林

林 たえば GLAN FABRIQUE のトイレにもデュシャンの「泉」を模した作品がありますけど、デュシャンはとにかくセンセーショナルで、人々の価値観をひっくり返した。おそらく城下さんの中には、それと同じぐらいのインパクトを自分の表現で与えたいって思いがありますよね。

城下 デュシャンに衝撃を受けたのは多分にあります。そういうインパクトを自分で起こせたらとは思んですけど、真似や「デュシャンっぽいこと」ではなく、いったんデュシャンから離れて、僕なりにやれる表現はやっぱりこれかなと思ってるんですよ、今は。

福元 今までの絵画の歴史の中で、創造性の高い作品を残してきた作家というのは、例外なく「絵画とは何か？」を独自の形で問うています。その問いを城下さんなりの言葉で表現するとどうなりますか？

城下：安っぽく聞けるかもしれないけど、僕にとっての絵画とは「自由」になっちゃう。現代アートが起こしてきた「事件」によって、自分が限界やルールと思っていたものが取っ払われる瞬間を味わってきたし、「こんなのも美的概念に入るんだ」って、どんどん自由になっていった気がするんです。

福元：絵画とは自由なものというのは特に新しい考えではないけれど、自由という言葉の解釈次第では、個性が生まれる余地もあるかもしれない。自由とひと言で言ってもいろんなありかたがある。制約の中で生まれる自由とか、ルールすら取っ払った自由とか。城下さんなりの「自由」を掘り下げて考えてみると、また次のステップに行けるのかなという気がします。

林 自由の解釈や定義について、言葉を増やしていくことが今後のヒントになるということですね。ちょっと思うのは、美術を「解釈」や「定義」といった文脈で補足していく流れっていうのは、どちらかというと西洋美術の色が強いんですよね。でも最近、現代美術館の現場にながらおられる方とお話する機会があったんですけど、「どうもそういった文脈では語り切れないアーティストが増えてきてる」とおっしゃっていて。美術を言語化し評論する立場の方々も実際悩まれているんだなとも感じるし、そこから美術の在り方をめぐって、新しい価値観や建設的な話が生まれてきたら個人的には面白いなと思うんです。ただ、その混沌の中でふるいにかけて残っていくためには、福元さんのおっしゃるように「言葉を持っておく」ということは大事なことなのかなと思います。

観客との対話—城下作品を見つめる、それぞれのまなざし

林 ではこちらへんで、会場のみなさんからご質問があれば…。

観客 私自身も城下さんと同じく作品を作ったり、展示したり、生かすこと語ることを考えてる立場なんですけど、鑑賞者として私が城下さんの作品から感じることは、自由っていうよりはルールなんです。城下さんもおっしゃったように最初に点とか線が生まれて、その横にこんな形の点や線がおのずと生じてくると。それって城下さんの中でのなんらかのルールというか「これではなければならない何か」というのが絶対にあって、それは決してほかの線や点や濃淡ではだめだというのが必ずある。その集積でできあがった城下さんなりの完璧な世界を私たちは見せてもらってるというも感じるんですね。見る側としてはそこに隠されてるルールの正体をすごく知りたい気持ちになるんですが…。

城下 僕もなんでこんな形になるのかとか全然わかってなくて、これも抽象的になってしまうけど、空を見上げた時に雲の形って完璧やなっていつも思うんです。もうちょっとここがこんな形になったらいいなとか思ったことがない。葉っぱとかも裏返してみてここにこんな葉脈があったらなとか思うことがない、完璧で。そういう、これ以上ない、出来上がった世界をかいてる感じなんですよ。

観客② 話を伺っていると、描いている行為に意味があって、城下さんの絵は「行為の痕跡」なのかなと思ったんです。城下さんが描いてる時って、まるでペンを紙を蝕んでいくような感じで、そこを埋め尽くすようなというか…だから城下さんの心理が発散し終わった状態、蝕む行為が完了した状態、その時に城下さんが観客にこれをどう見てほしいって無いのは当然かもと感じました。これは質問ではなく感想ですね（笑）。

観客③ 質問したいんですけど10年間人に見せてこなかった城下さんは、別に鑑賞者を必要としてないんじゃないかと僕には思えて…。城下さんの中で、作品を社会にさらす必要性はあったのか、今もあるのか、というのは聞きたいです。

城下 正直にいうと、今でもかいてることが一番幸せで、もし急にどこからも展示の誘いがかからなくなったとしても、たぶん今後10年でも僕ずっとかいてると思うんです。積極的に見せようという気持ちはまだ育ってないというか…。見に来てくださった方の反応は純粋にうれしくて、今後もお誘いがあるならやりたいとは思いますが、今でもかいてる時の気持ちは一緒に変わってないですね、見せるための意識というか、こんなの見せたらいいかな？みたいなかき方はしてないです。

福元 そういう、人に見せるつもりがない、描くこと自体が自己目的化している作品には、実際にすごく面白いものもあるわけですが、偶然それを見出して美術史的価値に落とし込んでくれる人が現れたらそれは歴史に残るでしょうし、そういう人に出会わなかったら誰にも知られず闇に埋没していくっていう、運の話になってくると思います、身も蓋もないですけど（笑）。でも城下さんは手を動かしてりゃいいってわけじゃないですよ。何かの形を捉えて書かずにはられない。

城下 そうですね、かく行為にはすごく思い入れがありますが、ただ画面を塗りつぶせばそれでいいというわけでもない。

観客④ 今日のパネリストの方々が城下さんの絵にどんな仮説を持っていらっしゃるのか、聞いてみたいんですが…。

河上 城下くんがさっき言った言葉で雲や葉っぱの形が完璧だっていうことがありましたが、そもそも葉っぱがどうできてるかという、あの形にはちゃんとDNAの設計図があって、それに従ってひとつの細胞ができたら、それが次の細胞をオーガナイズして、最終的にあの形ができるんですね。さっき点ひとつ打ったら次の点の位置が見えて来るっていう話があったじゃないですか、それにすごく似てるなって思ったんです。最終的な完成が急に来るっていうのもね。たぶんそれって無意識のうちにDNAのような設計図がある気がするんですが…。

福元 僕は違う見方をしてて、重要なのは設計図どおりゴールに向かって進んでいくことじゃなくて、一個の点を打ち、一本の線を引く、そのたびごとに設計図を更新することなんじゃないかと思っています。考えてから手を動かすのではなく、手を動かしてから考えるのだとしたら、城下さんの作品の面白さは、制作過程そのものが自分を発見していく過程だといえる。今までの自分を更新して、未知の自分に出会う連続なんだって捉えたら、描くことそれ自体が目的となっている意義とか価値が生まれてくるんじゃないかと思います。

林 僕はまだ城下さんの作品を解釈しないようにしています。というのは、僕みたいに近くにいる人が解釈しすぎるのは危険だと思っているところがあるのと、美術の世界ってもっと解釈のしかたを広げられる可能性があると思っています。それは、城下さんの作品の中に、「そもそも美術とは、えがくとは何か」とでもいうような哲学的な何かがありとあるからで、むしろいろんな人たちに、いろんな切り口で話してほしいなと思っています。あと僕は単純に城下さんの人柄が好きで、そこに寄り添ってると感じるがあります。すみません、少し逃げましたけど（笑）。

城下 どうもありがとうございます。

林 長くなってしまいましたが今日のゲストの方々に拍手をお願いします。

トークを振り返って——城下浩伺

このトークセッションは2016年10月に行われたものです。この時から1年間、僕は福元さんからいただいた質問への答えをずっと考え続けています。

「絵画（アート）とは何か？」

マルセル・デュシャンがそれまで誰もアートだと思っていなかった新しい土地を開拓しました。それによって人々の価値観がひっくり返った。僕はその現象にとてつもない自由を感じるし、それが僕にとってのアートそのものです。でも、その後のいわゆる「現代アート」は、デュシャンが開拓した土地の中で空いているスペースを掘っているように見える。どんどん手付かずのスペースは少なくなってって、今では小さな小さな隙間、ニッチを見つけて掘って、これは誰もまだやってないだろうと言っているように見える。すごく窮屈で不自由に感じる。

僕が「自由」だと思うのは、どこに点を打ってもいい、ということ。それは無秩序なのではなくて、どこに点を打っても「正しい」ということ。そしてそれをちゃんと体現することが僕のアートといえるかもしれない。

やっている事を言葉で説明するのはやっぱり難しい。

ある人工知能の研究者の方が言っていた事だけど、「考える」ということは「感じる」に支えられていて、考えている事は感じている膨大な量のほんの一部でしかないらしい。

たぶん僕は膨大な量の「感じる」ことを、「考える」を通さないで絵にしているんだろうと思うが、これはきっと身体をもった人間にしかできない事ではないだろうか。

最近はその事を考えています。

言葉にする必要もないくらい当たり前だったことや、感じてはいたけど改めて言葉にしていなかったことを、鋭い質問で掘り起こしてくださった福元さん。またこの展覧会の展示構成で部屋ごとに異なるテーマを設定することで僕の作品世界を多面的に表現してくださった河上さん、僕の作家活動を支えてくださっている最大の理解者であり、トークの司会進行をして下さった林さん、2時間弱という長時間に渡るトークに付き合ってくれた観客の皆さま、そしてこうして読みやすい形にトークを編集して下さったクイールの松本幸さんに感謝を述べたいと思います。

ありがとうございました。